

## 取り替え子譚に関する一考察

山 田 徹 也

### はじめに

不可解な出来事を現実のものとして語るロシアの怪異譚<sup>(1)</sup>には、森の精や水の精、家の精といった妖怪やあるいは悪魔、魔女等の様々な超自然的存在が登場する。怪異譚の研究は、これまでこうした超自然的存在を軸に行われてきた。

例えばΩ.B.ポメランツェヴァの『ロシア・フォークロアにおける神話的形象』<sup>(2)</sup>やH.A.クリニチナヤの『ロシアの民間神話』<sup>(3)</sup>等の研究においては、森の精や水の精、家の精といった超自然的存在それぞれに1章が割り当てられ、超自然的存在毎に分析が行われている。また、O.A.チェレパノヴァやB.II.ジノヴィエフらによる怪異譚集の出版も超自然的存在によって分類区分がなされている<sup>(4)</sup>。当然のことながら怪異譚のモチーフ・インデックスにおいても超自然的存在の身体的特徴、行動パターン等が類別化され、項目立てがなされている<sup>(5)</sup>。

しかし、最近の研究では、超自然的存在を基軸とした民間信仰の研究だけではなく、怪異譚における語り手と語りの問題も注目されるようになった。例えば超自然的存在による予言の怪異譚について論じたM.H.ヴラソヴァの研究では、超自然的存在が予言したとの語りにはどのような背景があるのかに焦点があてられている<sup>(6)</sup>。またH.K.コズロヴァも語り手と怪異譚が生まれる背景の関係を指摘している<sup>(7)</sup>。こうした研究では、怪異譚を単なる超自然的存在に関する民間信仰の情報源としてだけではなく、語り手の心理的契機<sup>(8)</sup>と語りという面から論じようとしている。つまり、これらの研究では怪異譚の語りの問題について論じられているのである。

ロシアのフォークロア研究において、超自然的存在による赤ん坊の取り替えそのものを対象とした研究はほとんどなく、取り替え子譚は蒸風呂小屋の精で、怒らせると蒸気浴をしている人間を殺してしまうと考えられているバンニクや出産儀礼の研究等において従属的に扱われてきた。例えば、ロシアの妖怪研究や歴史歌謡の研究者である先のクリニチナヤは『ロシアの民間神話』において取り替え子について触れているが、それはバンニクが赤ん坊を攫うことがあるという指摘であり、バンニクの様々な特徴の1つとして挙げているに過ぎない<sup>(9)</sup>。そこで本論ではロシアの怪異譚において取り替え子がどのように語られてきたかを述べ、そしてその語りの内容と特性の関係について考察する。

## 1. 怪異譚の語りの特性

ロシアの怪異譚とは、不可解な事件が超自然的存在によってなされたと語られる話であり、かつその語られた事件がしばしば実際に起きうるものとして考えられている語りのことである<sup>(10)</sup>。こうした怪異譚の定義が確立されたのは比較的遅く、20世紀に入ってからロシア・フォークロア研究者であるポメランツェヴァによってなされた。

ポメランツェヴァは、フォークロア全体をまず韻文形態のフォークロアと散文形態のフォークロアに分ける。この韻文形態のフォークロアには民謡、巡礼歌、歴史歌謡等が含まれる。

そして彼女は散文形態のフォークロアを、実際に起きたこととして語られるジャンルと語りの内容が事実であるかどうかに関しては重要視されない2ジャンルに分けた<sup>(11)</sup>。地名の由来譚等の伝説、聖者等にまつわる宗教伝説、そして本論で取り上げる怪異譚は前者の実際に起きたこととして語られるジャンルに属する。また、後者にはアnekドート、昔話といった完全に虚構として受容されるジャンルが含まれる。

また更に、彼女は、怪異譚をその特性によって2つに大別しうると主張している。

まずポメランツェヴァは、多くの怪異譚では場所や人間が「自分の村で」、あるいは「叔父が」等と実際に存在するものが具体的に挙げられ、そして起きたとされる事実のみが淡々と感情や空想を交えずに語られると指摘する。

またこうした怪異譚のもう1つの特徴として、そもそも超自然的存在そのものがさほど登場せず、不可解な事件だけが超自然的存在の行為の結果だとして語られる。仮に超自然的存在が語りの中に姿を見せたとしても、彼らはほとんど話すこともなく、言葉を口にしたとしても一言だけ短く話すといった程度であることが指摘されている。超自然的存在が一言だけ話す例として以下の怪異譚を挙げたい。

**例1** 「これは戦争の後、僕の身にあったことだ。僕が夜会から帰ってきた後のこと、寝ていると胸の上に誰かが乗りかかり、目も開けられなかった。僕が凶か、吉かと聞くと、彼は一言、「凶」と言った。すると楽になった。2日後、大工仕事をしに僕が出かけると、僕たちの方へ走ってくる人たちがいて、小屋が3軒、倒れてしまったといった。つまりこれが凶になるってことだったのさ。

彼には吉か凶か聞かなくてはいけないのさ」<sup>(12)</sup>

この話はロシアではドモヴォイと呼ばれる家に棲むとされる精の怪異譚である。ロシアの民間信仰によればドモヴォイは夜寝ている人間を金縛りにかける。そしてそのときに「吉か凶か」と訊くと未来のことを教えてくれると考えられていた<sup>(13)</sup>。

こうした人物や場所を具体的に語るという語りの特徴は、話の内容を事実あるいは現実的なものと結びつけることによって、語りの内容を聞き手に対してより現実的なものとして認識させる。つまり、こうした特徴を持った怪異譚では、不可解なことをより現実的なものとして語ることが重視される。

また一方ポメランツェヴァは、語りを現実に起こりうるものとして受容されることよりも、出来事の不可思議さがどのようなものであったのかを重視する怪異譚も存在していると指摘している。こうした怪異譚では、しばしば場所や人物等は逆に具体性を欠き、場所や人物が「あるところで」や「ある人が」等と曖昧に語られる。またそれ以外にも明確な特徴としては、超自然的存在が明確な言葉を持って人間に対して先の例1のような一言だけではなく長く話しかける、あるいは人間と会話すらするということもある。

具体性の欠如や超自然的存在が話すといった特徴は、実際に起きたこととしては考えられない完全に虚構の語りとして受容される昔話においても見られるものである。そのためこのような怪異譚は、虚構の話として受容される昔話に形式的に近づくことで、現実に起きたことであると語られながらも、虚構の物語として語られる側面をも持つ。また超自然的存在の台詞等により語りの分量が大きくなることが多いこともこうした怪異譚の持つ特徴の1つである。

ポメランツェヴァは、こうした2つの種類の怪異譚が見られる理由として民間信仰が次第に信じられなくなっていることを挙げている。彼女によれば、本来民間信仰を基盤としている怪異譚は基本的にその不可解さを説明することが目的であり、現実的なものとして語ることが重視される。しかし民間信仰が次第に薄れていくとともに、現実であったと語ることは重視されなくなり、最終的に怪異譚は、昔話やアネクドートのような現実に起きたこととしては考えられない、虚構の話として考えられるようになっていくと述べている<sup>(14)</sup>。つまり、現実に起きたことであると語られながらも、虚構の物語として語られる側面を持つ怪異譚は、本来の怪異譚が昔話へと過程の産物なのである<sup>(15)</sup>。

彼女のこうした指摘は妥当なものであり、同じく怪異譚の1つである取り替え子譚においてもあてはまるものである。

## 2. 取り替え子譚の語りの特性

ロシアの取り替え子の民間信仰に関しては、既に19世紀に『ロシア民話集』の編纂者としても知られるアファナシエフが『スラヴ人の詩的自然観』の中で論じているものの<sup>(16)</sup>、A.アファナシエフ以降、取り替え子の民間信仰が研究者たちの特別な注意を引くということはなかった。取り替え子が補足的に取り上げられたことはあるが、総合的に取り替え子の民間信仰が取り上げられたのは、おそらくヴラソヴァによる民間信仰に関する事典『ロシアの迷信』の中における同名の項目においてのみであろう<sup>(17)</sup>。

ロシアにおいて信仰されてきた取り替え子とは、超自然的存在が人間の赤ん坊を攫い、その身代わりとして残した子のことを指す<sup>(18)</sup>。彼らは蒸風呂用の枝箒や木切れ等が人間の子供の姿に変化(へんげ)させられたものとも、超自然的存在自身の子供とも語られ、しばしば病弱で、成長せずに衰えて死んでゆく存在であると語られる。

また子供の取り替えは、大人や既に自我を持った子供ではなく、特に洗礼前の赤ん坊に対して行われるものであるとも考えられている。出産直後の赤ん坊は洗礼を受けておらず、それゆえに超自然的存在の悪意から身を守ることができないと考えられていたためである。

一例として1961年に北ロシアで採録された取り替え子譚を挙げる。

**例2** 「それから、蒸風呂小屋で子供が取り替えられるんだ。チャバムィに住んでいた女の人の所では彼女の子もこっそり取り替えられてしまったんだ。子供は18歳まで全然大きくならなかつたそうだ。蒸風呂小屋に水が足りなかったとき、母親は子供を置いて水を取りに出て行ってしまった。そして戻って来た時には、女の子はそれまでとどこか違っていた。そのあとその子は18歳まで生きていたし、食べることもできたけど、成長せず、おなかばかりが大きくなつて、這うこともできず、その後死んでしまつたんだ」<sup>(19)</sup>

例2において子供を取り替えられたとされる場所は蒸風呂小屋である。これはロシアにおいて蒸風呂小屋が単に蒸気浴をするための場所としてだけではなく、出産の場としても用いられる建物であったため、赤ん坊が取り替えられる場所としても恐れられてきたためである<sup>(20)</sup>。

またこの例2では超自然的存在の名前は特定されていないが、ロシアの民間信仰では、子供を取り替えるとされる超自然的存在は様々で、森に棲み獸たちの主人とも考えられている森の精レーシイ、女性の姿をし、川に人間を引き込むとされる水の精ルサールカ、蒸風呂小屋に棲み、彼らの許可なしでは殺されてしまうとも恐れられる蒸風呂小屋の精バンニクや同じく蒸風呂小屋の精であるオブヂェリーハ、悪魔といった超自然的存在が人間の赤ん坊を攫い、その代わりに取り替え子を置いていくとされている<sup>(21)</sup>。

また子供を取り替えると考えられているのは妖怪や悪魔だけではない。南シベリアにおいては魔女が赤ん坊を取り替えたという話も採録されている。

**例3** 「うちの村に、ある夫婦が住んでいた。夫が見ていると妻は何日も何にも食べずにいた。だから彼は彼女のことを監視するようになったんだ。するとあるとき彼女は軟膏を作り、自分の脇の下に塗ると、煙突から飛んで行ってしまった。〈引用者略〉

すぐに彼もまた軟膏を塗って彼女の後を追った！すると彼女は妊婦のいる家に飛んで行った。妊婦は寝ていたが、彼女はその女性のお腹から赤ん坊を取り出すと、代わりに（葉のな

い) 枝箸を置いた。〈編者略〉夫はそれを見ると、彼女に目を向けることもできなくなった。  
そんなことがあったので彼は他の女性のもとに行ってしまったんだ」<sup>(22)</sup>

例2、例3の場合、これらの話では、共に子供が取り替えられた場所が明らかにされており、語り手は実際に事件が起きたのであるということを聞き手に受け入れさせることを目的としていることが見て取れる。特に例3では、胎児を盗んだとされる魔女が語り手と同じ村の住人であることまで明らかにして、語りを現実的なものであるとする印象をより強く与えようと努めている。

次に現実に起きたことであると語られながらも、虚構の物語として語られる側面も持つ例として蒸風呂小屋の精オブヂェリーハ<sup>(23)</sup>による取り替え子の話を取り上げる。

例4 「新年を祝おうと皆で集まった時のことだ。ある男が勇気のあるところを見せようと『蒸風呂小屋の炉から石を取ってくるよ』と言った。

彼は真夜中に1人で蒸風呂小屋に行った。彼が小屋の中に入ると、彼女に足をつかまれてしまった。彼はもがきにもがいたが、振り切ることができなかった。すると足をつかんでいた奴が『お嫁にしてくれたら離してあげる』と言った。

彼はさらに振り切ろうとしたが、振り切れず、結婚すると約束した。

彼は足が離されるやいなや、石も取らずに蒸風呂小屋から逃げ出した。そして家に帰ると皆の所には行かずに寝てしまった。次の日、彼がふさぎこんでいたので、両親は『どうしたんだ』と尋ねた。

しかし彼は黙っていた。夜になるとオブヂェリーハの『約束よ。お嫁にしてちょうだい』という声を彼は聞いた。

その後も両親は彼にずっと『何かあったみたいだけど?』と訊き続けたので、彼は両親に何があったのか話した。

両親は『約束したのなら嫁にもらいなさい。そうしないと家に火をつけられるかもしれないから』と言った。

翌日もオブヂェリーハが門の所にやってきて、『お嫁にして』と言った。

そこで彼は十字架を持って、会いに行った。門の所で彼女に会って、十字架を当てる、彼女は突然目に見えるようになったが、裸だった。彼女は裸だったので家に入ろうとはせず、『私に野良衣を持って来て』と言った。

そして彼女は彼の女房になったんだ。

それから二人は長いこと一緒に暮らしていた。斎期前の最後の肉食日が近づいてくると、他の人々は妻の実家にご馳走になりに出かけていったが、彼はどこにも行けないと考えていた。すると彼の妻は『何を考え込んでいるの?』と尋ねた。

『考え込まずにはいられないよ。皆は出かけてしまったのに俺はオブデリーハと結婚したからどこにも行けないんだから』

『誰のところにも行けないなんて考えないで。私にも両親はいるのよ』

そして彼らもご馳走になりに行く支度をして、妻の両親の所に出かけた。彼女の両親の所には揺りかごがあって、そこには頭は大きいけれど、胴体のほとんどない子供が寝ていた。そいつは1時になると牛乳を壺で1杯とライ麦の大パン1つを食べてしまうのだった。妻は揺りかごに近づくと、赤ん坊を床に投げつけた。するとその子は枝縄になってしまった。彼女は『ほら、お父さん、お母さん、私の代わりに誰にご飯をあげていたのかわかった？私はオブデリーハに取り替えられてしまったのよ』と言った。

そして彼らは十分にご馳走になって、幸せに暮らすようになった」<sup>(24)</sup>

この例4において娘は十字架を当てられると、裸の姿で現れる。このように超自然的存在は通常、彼らによって攫われた子供も含め、触ることはできるが、人の目には見えないと語られることが多い。

この話では攫われ、取り替えられた娘は男の助けによって自分の親元に戻ることができた。次に挙げる例では同じく取り替えられていた本物の子供が戻ってくる怪異譚ではあるが、取り替え子を殴ると本当の親である超自然的存在がやってきて本物の子供を返すという話である。

**例5** 「以前は沢山の家畜がいたんだ。そこである男は干し草が必要だったんだ。薪も小麦なんかもね。

あるときその男の奥さんは、赤ん坊にお乳をあげると、家畜の世話を出ていってしまった。  
〈編者略〉 子供は寝ていた。男が帰ってきて昼飯をくれというので、彼女は鎌鉄の鍋を出したが、鍋の中の骨には肉がついてなかった。骨しか入ってなかつたんだ。百姓は悪態をついて、お茶だけ飲んだ。〈編者略〉 誰がわかるっていうんだい！？

次の日には骨付き肉を2つ作っておいたが、これも齧られてしまっていた。奥さんがばあさんたちに話すと、ばあさんたちは『おまえさん、今日は家にいて、家畜に水を飲ませに岡かけるんじゃないよ。雌牛を外に出したら、自分は窓の下にいるんだ』といった。

それで彼女が窓の下に立って家の中を見はじめた。そのとたん、揺りかごが猛烈に揺れ始め、揺りかごから見知らぬ男がでてきてナイフとフォークをとって骨を齧り、そして揺りかごに戻っていった。

彼女は小屋の中に入つていけなかった。怖かったんだ。するとそこに旦那が帰ってきたので彼女は、『私、小屋には入れない。揺りかごに男がいるのよ』といった。〈論者略〉

老人たちが集まって、1人が『9つの棒杭と6つの藁束を折るんだ』といった。

そして6人の老人たちがやってきた。それでね。そいつを振りかごから出して、床に寝かせた。ふたりが押さえていて、ひとりが殴った。それで3回目に殴ろうとすると、そいつは大声で泣きはじめた。ロシア語ではなく、山羊のような泣き声だった。〈編者略〉それで5回目を殴ろうとすると、猫のようでもなく、山羊のようでもないもっとひどい声で泣き出した。すると突然扉が開き、女性がその子供をひっつかんだんだ！そして悪態をついた。『おまえは私の子には十分に食べ物はあげないし、お乳も十分にあげなかった。こんどは殴るなんてことを思いつきやがって！ほらおまえの子だよ。そこでこっちが私のだ』そういうと消えてしまった。

あれは悪魔の子だったのさ、本当の子供は取り替えられていたんだ』

例4と例5、特に例4において語り手が意識している最も重要な目的とは、事件が実際に起きたということを伝達することではない。これら怪異譚では事件がどこで、いつ起きたことなのかは具体的に語られない。また人物に関しては「ある男」等とのみ語られ、明確さに欠ける。そして特に例3では語りの大半は登場人物たちの台詞が占め、こうした台詞がより語りの内容を興味深く聴かせることになる。また例5においても超自然的存在は最後ではあるが登場し、子供を単に返すだけではなく、わざわざ『おまえは私の子には十分に食べ物はあげないし、お乳も十分にあげなかった。こんどは殴るなんてことを思いつきやがって！ほらおまえの子だよ。そこでこっちが私のだ』と捨て台詞を残してから消える。例4、例5が、不可解な出来事が起きたということを説明するというよりも、不可解で、不可思議だとされる事件をいかに語るかということに語り手の関心がより強く向けられているのは明らかである。

以上のように取り替え子譚もまたポメランツェヴァの言う語りの特性から2種類に大別することができる。また取り替え子譚において、ポメランツェヴァのいう2種類の怪異譚が存在しているということは、語りの長さという点からも明らかである。例2では超自然的存在は、会話どころか、その姿さえ見せることはない短い語りである。例3は魔女という現実に存在する人間が超自然的存在として扱われているために、超自然的存在自身は登場しているが、やはり会話はこの話には存在しておらず同様に短い。しかし、例4では攫われた娘は、超自然的存在のオブザベリーへの娘という形で登場し、肝試しに出かけた男と話を交わす。そのため例4は他の例に比べ、語りが長くなっているのである<sup>(25)</sup>。

### 3. 取り替え子譚の語りの特性と内容

取り替え子譚においてポメランツェヴァの主張する語りの特性から2種類の怪異譚を確認することができる。一方で語りの内容という点からもこの2種類の取り替え子譚は異なっている<sup>(26)</sup>。つまり現実的なものとして語ることが重視される怪異譚である例2、例3は、共に超自然的存

在によって人間の赤ん坊が攫われ、そして身代わりとして取り替え子が置かれたと語られる。一方、虚構の物語に近いものとして語られる例4、例5は、逆に取り替えられた人間の子供が超自然的存在の世界から人間の世界へと帰還し、取り替え子の正体を暴くことを主題とした怪異譚である。

こうした語りの特性と語りの内容が一致するのはこうした例だけではない。怪異譚の出版は19世紀末から本格的に開始されたが、こうした活字化された怪異譚を論者が確認した限りにおいては、不可解なことをより現実的なものとして語ることが重視される語りが用いられている怪異譚では例1、2のような赤ん坊の取り替えが中心に語られ、一方虚構の物語に近いものとして語られる怪異譚では取り替えられた子供の帰還が主題とされる傾向にある。

このような傾向が見られるのは単なる偶然ではない。取り替え子譚ではしばしば例1、例3にみられるような取り替え子の外見の異様さと全く成長しないことについて言及される。民間信仰はしばしば現実との関係について指摘され、取り替え子の外見に関しても、取り替え子の民間信仰があることで有名なアイルランドの民間信仰研究者の一人である Carole G. シルバーは、囊胞性線維症、脳性麻痺等の病気の症状と取り替え子の異様な姿が合致すると指摘している<sup>(27)</sup>。

またロシアにおいても取り替え子として考えられている姿は、赤ん坊の一種の身体的、あるいは精神的障害と一致するという同様の指摘が、Г.И.ポポフの『ロシアの民間療法—テニシェフ公爵の民俗学ビューローの資料に基づいて—』においてなされている<sup>(28)</sup>。

つまり、現実としては、子供は取り替えられたのではなく、死病にとりつかれてしまったのであり、その事実について語ったものが超自然的存在による育たない嬰児に取り替えられたという怪異譚である。それゆえ嬰児がすり替えられたという話は、こうしたありうるべき事実を背景に持つが故に、より現実的なものとして語ることが可能である。

一方、例4、例5の怪異譚では、本当の子供が戻ったと語られる。本来こうした子供の帰還は実際にはありうべからざることであり、話の内容自体が虚構である。つまり本来であれば完全に虚構の話として怪異譚というジャンルではなく、昔話として語られなければならないのかもしれない。しかし、それでもこうした本物の子供が戻ってきて取り替え子の正体を暴くという話が怪異譚として語られるのは、それが民間信仰的観点から実際に起きうことだとされているからである。

ロシアの民間信仰的観点からは超自然的存在による赤ん坊の取り替えは、超自然的存在による人攫いの一種として考えられている。例えば超自然的存在による取り替え子譚以外の人攫い譚の代表例としては以下のような怪異譚がある。

例6 「そんでターニャ・カシヤノヴァについてなんだね。彼女には母親と5人の姉妹がいたんだけど、父親のほうは既に死んでしまってね。〈編者略〉 そんでパンがなかった。だ

から彼女は、せめてパンの配給だけでもお願ひできなかつたんだ。でも家族の誰に対しても配給してもらえるようにはなかつた。それで彼女は父親のことを思い出した。『父ちゃんが生きていたら、父ちゃんならきっと配給をもらえるようにできただろうに』すると父親が突然現れて『一緒にいこう』といつた。そして彼女を森に連れて行ったんだ。

それで彼女はいなくなってしまった。長いこと捜したんだけど、見つからなくて、一週間以上経ってから見つかった。彼女は逃げようとしたもんだから、苦労して捕まえた。

『どこにいたんだ?』

『とうちゃんのところだよ。とうちゃんの家では、なんだって白い敷布でくるまれてるんだ』

『何を食べてたんだ?』

『白パンだよ。今もポケットの中にあるよ』 そういってキノコのような白樺の木の瘤を取りだした。

『ほら、とうちゃんのパンだよ』

一体どうして、どこにいたんだろうね」<sup>(29)</sup>

この怪異譚は1977年に採録された。ロシアの取り替え子譚では、取り替えられたとされるのは主に赤ん坊であったが、人攫い譚全体としてはこの例6のように一定年齢以上の子供も攫われたと語られることがある。

この話では攫われた人物は、ターニャ・カシヤノヴァという具体的な人間である。また話の後半は会話で占められているが、ターニャという女の子と他の人間の会話であり、超自然的存在と人間の会話ではないため、この例6は、より現実的なものとして語ることが重視されている怪異譚である。

これはレーシイ等の超自然的存在に連れ去られたとされる人間が、取り替え子の怪異譚のような赤ん坊ではなく、大人や例6で見られるような既に自分で歩くことのできる子供であり、実際には単なる迷子や家出であったこともあったであろう。先の例3、例4の人間の赤ん坊が取り替えられたと語られる怪異譚の場合と同様に、こうしたありうるべき事実を背景に持つが故に、この例6のような超自然的存在によって攫われた人間が帰還する話も、実際にあったこととして、つまり怪異譚として語ることが可能である。

一方、繰り返しになるが例4、例5のような怪異譚で語られる取り替えられた本当の子供が戻ってくるという事件は、実際には起こりえないことであり、本来は完全に虚構の物語として昔話というジャンルにおいて語られるべきものなのかもしれない。しかし、取り替えられて本当の赤ん坊がいなくなつたとされる事件は、ロシアの民間信仰的観点から見ると超自然的存在による誘拐の一種であり、超自然的存在による赤ん坊の取り替えも、例6のようなレーシイによる誘拐も怪異

譚超自然的存在による人攫いという点で同一のものとして扱われる。

そのため取り替えられた本当の子供は、民間信仰的観点からは超自然的存在の元で生きていると信じられただけではなく、彼らが帰ってくるということも現実にありうるのではないかと容易に想定できる。そしてそれゆえに例4、例5のような超自然的存在によって取り替えられた本物の子供の帰還に関する話は、完全に虚構の物語としては語られない。怪異譚の基盤となっている民間信仰的観点からは取り替えられた子供が戻ってくるという考えはまったくの非現実的なことではないために、完全に虚構の物語である昔話としてではなく、実際に起きたこととされる怪異譚として語られるのである。

### 結論

既に述べたように取り替えられた人間の子供が妖怪の世界、いわゆる異界から現世へと戻ってきたと語られる怪異譚の場合、語りにおいてはどのように魅力的に語るかということが重視され、そのために話の内容をより現実的なものとして語ることは重視されなくなり、語りとしては昔話と類似する。これは、前述のポメランツェヴァによれば、民間信仰が弱まった結果であるとされている。

こうした民間信仰の希薄化が、怪異譚の虚構化、ひいては昔話化に結びつくという彼女の論に関しては論者も賛同するものではある。しかし語りの内容と語りの特性の関係は、民間信仰が強固に信じられているかいないかという視点からのみ考えるべき問題ではなく、語り手がどのような意図で語っているのかという視点からも研究が求められるものである。

取り替え子譚でいえば、人間が取り替えられたと語られる怪異譚も取り替えられていた本物の人間の子供が戻ってくるという怪異譚はどちらもが超自然的存在による赤ん坊の取り替えという民間信仰を基盤としている。ポメランツェヴァによれば民間信仰の希薄化が昔話化を呼び起こすものであるため、民間信仰の希薄化による昔話化は一律に怪異譚の昔話化を促すはずである。

しかし、結果としてはそうはならない。超自然的存在によって人間の赤ん坊が攫われ、そして身代わりとして取り替え子が置かれたと語られる話は現実的なものとして語ることが重視される怪異譚として、取り替えられた人間の子供が超自然的存在の世界から人間の世界へと帰還し、取り替え子の正体を暴かれたと語られる話は虚構の物語に近いものとして語られる怪異譚として語られることが多いことからわかるように昔話化にはその語りの内容によって偏りが見られる。

こうした偏りは心理的契機による分析によって説明できる。子供が取り替えられたと語られる怪異譚では、実の子が消えてしまったという人の嘆きを読み取ることが出来る。例2として挙げた代表的な取り替え子の怪異譚では、あるいは他の怪異譚においても側聞という形で語られているにせよ、語りの背後にあるのは育たなかった子を悲しむ親という存在である。

こうした子供を失った嘆きと語りの特性は無関係ではない。取り替えられたことによって健康

な子を失ったとする語りでは、失われた子供という嘆きについて語られるからこそより現実的なものとして、実際に起きたこととして語られるのである。

一方、失われた子供が帰ってくるという怪異譚では、現実には起きることはないと理解しても、失われた本当の健康な子供に帰ってきて欲しいという願いが込められている。本当に子供が帰ってくるという信念が語りを成り立たせている。

ただしこうした願いは全くの願望、空想といったものではない。ロシアでは、超自然的存在による赤ん坊の取り替えは超自然的存在による人攫いの一種として考えられているが、しばしば取り替え子譚以外の人攫い譚では超自然的存在によって攫われたと考えられた人間は戻ってくるとも語られた。そのため取り替えられた本当の赤ん坊が戻ってくるという話もまた、ある程度の現実的な色合いを帯びてくる。そのために虚構の物語に近いものとしてではあるものの現実的な話として語られるのである。

以上の点をポメランツェヴァは指摘していないが、これは彼女が怪異譚を語り手側の心理的契機という意味では論じていないためである。

このように怪異譚における語りの内容と語りの特性の関係は、一概に民間信仰という面においてのみ論じることはできない。しかし心理的契機による分析は、語り手が何を意図して語っているのか、いかなることについて語ることを要求しているのかをより明確に読み解くことが可能であり、かつ怪異譚の昔話への移行の過程がより正確に見えてくるものである。

怪異譚が口承芸術の1ジャンルとして存在し、かつ語られるのには何らかの理由や動機がある。語られる意図を知ることができるという点で、心理的契機について考えていくことは今後怪異譚を口承芸術として研究していく上で非常に重要な要素である。

### 注

- (1) 本論では怪異譚を *мифологический рассказ* の訳としてあてる。
- (2) Померанцева Э.В. Мифологические персонажи в русском фольклоре. М., 1975.
- (3) Криничная Н.А. Русская народная мифологическая проза. СПб., 2001.
- (4) Черепанова О.А. Мифологические рассказы и легенды русского Севера. СПб., 1996.; Зиновьев В.П. Мифологические рассказы русского населения Восточной Сибири. Новосибирск, 1987.
- (5) Зиновьев В.П. Мифологические рассказы. С. 305-320.
- (6) Власова М.Н. Сюжет о пророчестве // Русский фольклор. Том XXXII. 2004. С. 215-229.
- (7) Козлова Н.К. Восточнославянские былички о змее и змее х : мифический любовник: указатель сюжетов и тексты. Омск, 2000. С. 8.
- (8) ウラジーミル・プロップ著(北岡誠司、福田美智代訳)『昔話の形態学』1983年、白馬書房、34頁。; 本論では語り手の動機、動因を表すモチーフという語の替わりに、心理的契機という表現を用い、ロシアの怪異譚における取り替え子の語りを取り上げる。本来ロシア・フォークロア学においては、プロップの『昔話の形態学』にあるようにモチーフという術語はプロットを構成する語りの構成部分という意味で用いられているからである。

- (9) Криничная Н.А. Русская народная мифологическая проза. С. 66.
- (10) Толстой Н.И. Былички // Славянские древности. Т.1. 1995. С.278.
- (11) 前者の、実際に起きたこととして語られるフォークロア・ジャンルを、ニエスカーゾチナヤ・プローザ  
несказочная проза、後者の虚構とみなされているものをスカーザチナヤプローザ **сказочная проза** とポメラン  
ツェヴァと呼んでいる。
- (12) Черепанова О.А. Мифологические рассказы. № 88.
- (13) またドモヴォイに金縛りをかけられるのは彼の通り道に寝てしまったからであるとも、またドモヴォイが  
その人間自体を家の中に受け入れたくないためであるともされる。
- (14) Померанцева Э.В. Мифологические персонажи. С. 25-26.
- (15) Там же. С. 13-26.; ポメランツェヴァは、こうした分析をもとに怪異譚をブィリーチカ **быличка** とブィヴァー  
リシチナ **бывальщина** というジャンルに大別している。これらのジャンルの定義に関しては、塙崎今日子  
「ブィリーチカ再考」『ロシア文化研究』第4号、1997年、89-98頁に詳しい。
- (16) Афанасьев А. Поэтические воззрения славян на природу. Т.3. М., 1994. С.305-317. (1869年初出)
- (17) Власова М. Русские суеверия. СПб., 2001. С.363-367.
- (18) ロシア・フォークロア研究において取り替え子を意味する用語は一定しておらず、**обмен**、**обменыш**、  
подменыш の主にこの3つが取り替え子を意味する用語として用いられている。詳細に関しては拙著「攫わ  
れた子供たち—取り替え子の民間信仰について—」『なろうど』2008年10月を参照していただきたい。
- (19) Балашов Д.М. Сказы Терского берега Белого моря. Л., 1970. № 126(2).
- (20) Липинская В.А. Баня и печь в русской народной медицине // Липинская В.А. (ред.) Баня и печь в русской  
народной традиции. М., 2004. С. 175-181.
- (21) Власова М. Русские суеверия. С.363-367.
- (22) Зиновьев В.П. Мифологические рассказы. № 216.
- (23) オブヂェリーハは皮を剥ぐ女という意味である。真夜中等の禁忌として考えられている時間に蒸風呂小屋  
に行くと、バンニクやこのオブヂェリーハが怒り、その人間の皮を剥ぐ等すると考えられた。
- (24) Карнаухова И.В. Сказки и предания северного края. СПб., 1934. № 80.
- (25) 具体的には例1が67語、例2が87語、例3が289語である。例3が他の2つの怪異譚よりも3倍以上長い。
- (26) Померанцева Э.В. Мифологические персонажи. С. 25-26.
- (27) Silver Carole G. Strange and secret peoples: fairies and Victorian consciousness. New York, 1999. p. 75.
- (28) Попов Г.И. Русская народно-бытовая медицина. По материалам Этнографического бюро князя В.Н. Тенишева.  
СПб., 1903. С.361.
- (29) Зиновьев В.П. Мифологические рассказы. № 35.